

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会保障特殊講義	田畑 洋一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613640

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会保障の政策原理と改革に関する基礎的研究

- 1) 社会保障の基本原理の研究
- 2) 社会保障の政策課題
- 3) 諸外国の社会保障改革

概要

社会保障の政策原理を多角的に探求し、わが国社会保障の将来像を考察する。具体的には、前期課程の研究課題である社会保障の基本原則、各制度の有機的連携、介護給付のあり方などの論点をいま一度整理するとともに、諸外国で行われた社会保障改革、とくにドイツの要介護の「新概念」を中心に、介護保障に関する日独比較を行い、わが国社会保障の政策原理ならびに改革の方向を展望する。しかし、後期課程ではこれらの課題を踏まえつつも、院生の個別研究テーマに即応した論点を明らかにし、独創的な研究成果の構築に資する指導に留意する。

キーワード

要介護認定、介護給付、要介護の「新概念」

授業の到達目標

- 1) 社会保障の基本原則、特にドイツの介護保険の基本原則を学ぶことで社会保障の現在および将来の展望が可能になる。
- 2) 社会保障の政策課題を学ぶことで自らのテーマの論点を明らかにできる。
- 3) 諸外国の社会保障改革に関する先行研究を踏まえることで自らの論文の独創性の構築に寄与できる。

授業計画

- ① 社会保障の課題・論点の整理
- ② 社会保障の原理原則
- ③ 社会保障の各制度の連携
- ④ 社会保障の給付システム
- ⑤ ドイツの社会保障と社会保険
- ⑥ ドイツ介護保障の政策原理
- ⑦ 要介護認定の日独比較
- ⑧ 要介護認定の日独比較
- ⑨ 要介護度と給付の日独比較
- ⑩ 要介護度と給付の日独比較
- ⑪ 仕事の介護の両立
- ⑫ 生活保護と介護保険
- ⑬ 介護保障のあり方
- ⑭ 介護の社会評価

⑮ドイツ介護保障のわが国への示唆

授業の予習・復習

- ◇毎回4時間程度の予習・復習を行うこと。
- ◇第1回目の授業時に各自の研究計画書を提出すること。
- ◇各自のテーマに関連する先行の博士論文を入手しておくこと。

使用教材

- (1)Bundesministerium für Gesundheit, Zahlen und Fakten zur Pflegeversicherung. (20. Januar 2016).
- (2)Katrin Mohr(2007)Soziale Exklusion im Wohlfahrtsstaat vs verlag für sozialwissenschaften.
- (3)Gohde,J.(2013)Reformbedarf der Pflegeversicherung,G+S.
- (4)田畑洋一(2014)『現代ドイツ公的扶助序論』学文社.

評価方法

報告内容60%、平常点40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ◇定期的な授業のほかに、随時時間を設けて集中的に指導することがあるので、連絡先を届けておくこと。

前年度の授業評価

社会保障の政策原理と課題の深化は可能となったが、適宜、受講生の関心事について指導したため、シラバスどおりの授業進行とはならなかった。特に論文のまとめ方・書き方・引用文献の扱い方についての理解はかなり深まったと思う。

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会保障特講	田畑 洋一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613640

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会保障の政策原理と改革に関する基礎的研究

- 1) 社会保障の基本原理の研究
- 2) 社会保障の政策課題
- 3) 諸外国の社会保障改革

概要

社会保障の政策原理を多角的に探求し、わが国社会保障の将来像を考察する。具体的には、前期課程の研究課題である社会保障の基本原則、各制度の有機的連携、介護給付のあり方などの論点をいま一度整理するとともに、諸外国で行われた社会保障改革、とくにドイツの要介護の「新概念」を中心に、介護保障に関する日独比較を行い、わが国社会保障の政策原理ならびに改革の方向を展望する。しかし、後期課程ではこれらの課題を踏まえつつも、院生の個別研究テーマに即応した論点を明らかにし、独創的な研究成果の構築に資する指導に留意する。

キーワード

要介護認定、介護給付、要介護の「新概念」

授業の到達目標

- 1) 社会保障の基本原則、特にドイツの介護保険の基本原則を学ぶことで社会保障の現在および将来の展望が可能になる。
- 2) 社会保障の政策課題を学ぶことで自らのテーマの論点を明らかにできる。
- 3) 諸外国の社会保障改革に関する先行研究を踏まえることで自らの論文の独創性の構築に寄与できる。

授業計画

- ① 社会保障の課題・論点の整理
- ② 社会保障の原理原則
- ③ 社会保障の各制度の連携
- ④ 社会保障の給付システム
- ⑤ ドイツの社会保障と社会保険
- ⑥ ドイツ介護保障の政策原理
- ⑦ 要介護認定の日独比較
- ⑧ 要介護認定の日独比較
- ⑨ 要介護度と給付の日独比較
- ⑩ 要介護度と給付の日独比較
- ⑪ 仕事の介護の両立
- ⑫ 生活保護と介護保険
- ⑬ 介護保障のあり方
- ⑭ 介護の社会評価

⑮ドイツ介護保障のわが国への示唆

授業の予習・復習

- ◇毎回4時間程度の予習・復習を行うこと。
- ◇第1回目の授業時に各自の研究計画書を提出すること。
- ◇各自のテーマに関連する先行の博士論文を入手しておくこと。

使用教材

- (1)Bundesministerium für Gesundheit, Zahlen und Fakten zur Pflegeversicherung. (20. Januar 2016).
- (2)Katrin Mohr(2007)Soziale Exklusion im Wohlfahrtsstaat vs verlag für sozialwissenschaften.
- (3)Gohde,J.(2013)Reformbedarf der Pflegeversicherung,G+S.
- (4)田畑洋一(2014)『現代ドイツ公的扶助序論』学文社.

評価方法

報告内容60%、平常点40%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ◇定期的な授業のほかに、随時時間を設けて集中的に指導することがあるので、連絡先を届けておくこと。

前年度の授業評価

シラバスどおりの授業進行とはならなかったが、受講生の関心事の発表にコメントを加え、特に研究計画、論文の内容・水準、独自性について検討・指導した。また論文の書き方・まとめ方・引用文献の処し方についての指導もその都度行った。

科目名	担当者名	開講学期	単位
高齢者福祉特殊講義	中山 慎吾	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

各自のテーマに合わせて高齢者福祉に関する文献を探し、文献の読解・発表を行い、関心のあるテーマについての発表を行う

概要

- ・今後の研究の発展を考慮し、英文を含む文献の探索と熟読を中心に行う(必ず予習しておくこと)。
- ・高齢者福祉に関するテーマを各自が選び、口頭での報告、およびレポート作成をする。
- ・レポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

高齢者福祉、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・テーマに合わせて高齢者福祉に関する文献を探ることができる(英文文献を含む)。
- ・高齢者福祉に関する文献を読解し理解することができる。
- ・自分が関心のあるテーマについての理解が深まる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(各自の関心確認等)
- 第2回 文献探索法(サイニー)
- 第3回 文献探索法(プロクエスト)
- 第4回 文献探索法(新聞記事)
- 第5回 文献探索法(ホームページ検索)
- 第6回 探索した文献の確認(各自のテーマ)
- 第7回 文献読解(読み合わせ)
- 第8回 文献読解(読み合わせ)
- 第9回 英文文献購読(文献の確認)
- 第10回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第11回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第12回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第13回 報告・討論(各自の発表)
- 第14回 報告・討論(各自の発表)
- 第15回 報告・討論(各自の発表)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

- ・テキストを指定する場合は、授業中等に指示する。
- ・参考文献: 中山慎吾(2011)『認知症高齢者と介護者支援』法律文化社

評価方法

授業での討論等への参加状況40%、レポート・発表等60%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・必要に応じ土曜日あるいは日曜日の昼間に補講をする予定である。・授業計画等に変更する場合がある。
- ・オフィスアワー等は授業開始時などに指示する。Eメール: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・授業途中で課したレポートや課題に関しては、授業等においてフィードバックを行う。

前年度の授業評価

前年度は開講しませんでした。

科目名	担当者名	開講学期	単位
高齢者福祉特講	中山 慎吾	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613692

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

各自のテーマに合わせて高齢者福祉に関する文献を探し、文献の読解・発表を行い、関心のあるテーマについての発表を行う

概要

- ・今後の研究の発展を考慮し、英文を含む文献の探索と熟読を中心に行う(必ず予習しておくこと)。
- ・高齢者福祉に関するテーマを各自が選び、口頭での報告、およびレポート作成をする。
- ・レポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

高齢者福祉、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・テーマに合わせて高齢者福祉に関する文献を探ることができる(英文文献を含む)。
- ・高齢者福祉に関する文献を読解し理解することができる。
- ・自分が関心のあるテーマについての理解が深まる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(各自の関心確認等)
- 第2回 文献探索法(サイニー)
- 第3回 文献探索法(プロクエスト)
- 第4回 文献探索法(新聞記事)
- 第5回 文献探索法(ホームページ検索)
- 第6回 探索した文献の確認(各自のテーマ)
- 第7回 文献読解(読み合わせ)
- 第8回 文献読解(読み合わせ)
- 第9回 英文文献購読(文献の確認)
- 第10回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第11回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第12回 英文文献購読(読み合わせ)
- 第13回 報告・討論(各自の発表)
- 第14回 報告・討論(各自の発表)
- 第15回 報告・討論(各自の発表)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

- ・テキストを指定する場合は、授業中等に指示する。
- ・参考文献: 中山慎吾(2011)『認知症高齢者と介護者支援』法律文化社

評価方法

授業での討論等への参加状況40%、レポート・発表等60%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・土曜あるいは日曜日に補講をする予定である。・授業計画等に変更する場合がある。
- ・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。Eメール: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・授業途中で課したレポートや課題に関しては、授業等においてフィードバックを行う。

前年度の授業評価

前年度は開講しませんでした。

科目名	担当者名	開講学期	単位
生涯教育特殊講義	千々岩 弘一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613790

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

人間の学びに関する内容の深化・拡充

概要

受講生の研究課題に即した内容を中心に講義する。
例えば、次のような講義展開となる。

- 1 研究課題の確認とオリエンテーション
- 2 研究課題に係わる教育界の歴史的展開
- 3 研究課題に係わる教育行政の要点
- 4 研究課題に係わる教育界の現状
- 5 研究課題に係わる教育界の問題点と課題

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:自ら(受講生)の研究課題に即しながら、人間の学びのある階梯に焦点化した講義を受け、自ら(受講生)の研究を深化・拡充することができる。

授業計画

授業計画としては、例えば次のような展開となる。

- 第1回講義計画の確認と受講に関するオリエンテーション
- 第2回生涯教育に係わる歴史的展開1
- 第3回生涯教育に係わる歴史的展開2
- 第4回生涯教育の現状1
- 第5回生涯教育の現状2
- 第6回生涯教育の現状3
- 第7回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究1
- 第8回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究2
- 第9回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究3
- 第10回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究4
- 第11回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究5
- 第12回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究6
- 第13回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究7
- 第14回受講生各自の課題意識に基づいた生涯教育分野のテーマに関する追究8

第15回講義の総括

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

授業の予習・復習

前時の助言を踏まえて、自分なりの課題を追究すること。

使用教材

必要に応じて適切な資料を配布したり、適切な文献を紹介したりする。

評価方法

評価は、次のような観点で行う。

- 1 授業への「関心・意欲・態度」
- 2 講義内容に関する主体的学習の有無
- 3 講義内容に関する理解と主体的な価値判断（「熟考・評価」として出された意見の質）

履修上の留意事項・授業時間外の対応

アポイントを取ったうえで、遠慮なく相談に来てください。

前年度の授業評価

受講生の博士論文のテーマに即しながら、児童養護施設での教育のあり方について追究した。

科目名	担当者名	開講学期	単位
生涯教育特講	千々岩 弘一	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613790

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

人間の生涯にわたる学び

概要

受講生の研究課題に即した内容を中心に講義する。
例えば、次のような講義展開となる。

- 1 研究課題の確認とオリエンテーション
- 2 研究課題に係わる教育界の歴史的展開
- 3 研究課題に係わる教育行政の要点
- 4 研究課題に係わる教育界の現状
- 5 研究課題に係わる教育界の問題点と課題

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:自ら(受講生)の研究課題に即しながら、人間の学びのある階梯に焦点化した講義を受け、自ら(受講生)の研究を深化・拡充することができる。

授業計画

授業計画としては、例えば次のような展開となる。

- 第1回講義に関するオリエンテーション
- 第2回生涯教育の現状1
- 第3回生涯教育の現状2
- 第4回生涯教育の現状3
- 第5回受講生の課題意識に関する講義と討議1
- 第6回受講生の課題意識に関する講義と討議2
- 第7回受講生の課題意識に関する講義と討議3
- 第8回受講生の課題意識に関する講義と討議4
- 第9回受講生の課題意識に関する講義と討議5
- 第10回受講生の課題意識に関する講義と討議6
- 第11回受講生の課題意識に関する講義と討議7
- 第12回受講生の課題意識に関する講義と討議8
- 第13回受講生の課題意識に関する講義と討議9
- 第14回受講生の課題意識に関する講義と討議10

第15回講義の総括

なお、講義の展開に当たっては、受講生同士の討論も重視する。

授業の予習・復習

前時の助言に基づいて、自らの課題を追究すること。

使用教材

必要に応じて適切な資料を配布したり、適切な文献を紹介したりする。

評価方法

評価は、次のような観点で行う。

- 1 授業への「関心・意欲・態度」
- 2 講義内容に関する主体的学習の有無
- 3 講義内容に関する理解と主体的な価値判断（「熟考・評価」として出された意見の質）

履修上の留意事項・授業時間外の対応

アポイントを取ったうえで、遠慮なく相談に来てください。

前年度の授業評価

前年度は開講しておらず、授業評価は行っていない。

科目名	担当者名	開講学期	単位
職業教育特殊講義	吉留 久晴	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613752

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

職業教育の理論と実態

概要

職業教育(専門職の養成教育)の現状や課題、今後の在り方について、①専門職従事者に求められる能力の水準(該当免許・資格の水準)、②専門職従事者に不可欠な能力の形成手段、③専門職従事者の職務上の地位や待遇といった点等から検討する。

キーワード

職業教育、専門職、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 職業教育に関する重要な知識・知見を習得することができる。
2. 職業教育に関する現状や諸問題について把握することができる。
3. 職業教育のあり方について多角的に考察することができる。

授業計画

1. 職業教育論を学ぶ意義
2. 専門職の概念
3. 準専門職の概念
4. 専門職団体の存在
5. 専門職の職域
6. 専門職の免許・資格制度
7. 専門職の報酬
8. 専門職養成をめぐる論議
9. 専門職養成の特徴
10. 専門職養成のカリキュラム
11. 専門職養成に関する課題
12. 専門職養成の事例1－教員－
13. 専門職養成の事例2－看護師－
14. 専門職養成の事例3－管理栄養士－
15. 総括

授業の予習・復習

各授業後に合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。資料を配付予定。

【参考文献】橋本鉦市(編著)『専門職養成の日本的構造』玉川大学出版部、2009年。

評価方法

配付資料の分担報告の内容(40%)とレポートの内容(60%)により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。

科目名	担当者名	開講学期	単位
介護福祉特殊講義	田中 安平	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

常在戦場ともいうべき介護現場において、利用者の望む生活に寄り添う介護福祉士に求められる介護の本質について、介護の哲学・倫理からひもといていく。

概要

感情労働といわれる中で、「利用者対援助者」の感情の有り様よりも「援助者対援助者」の感情の差異が介護職員の離職に影響を与える介護現場・福祉現場において、「なぜ」そのようなことが起こるのか、どこに問題があるのか等について介護労働の現状を分析することから探っていく。

合わせて、同職種間における職員の価値観の差異と、他職種との価値観の差異がもたらす利用者主体に対するベクトルの差異をどのようにコーディネートすべきかについて、社会福祉の視点から探っていく。

講義自体が研究の場であり、講義の内容を常に現場にフィードバックする中で、介護の本質について研鑽を深めていく講義とする。講義から現場へ、現場から講義へ実践展開を活かすことで、理想と現実の狭間における生活支援の哲学・倫理を身につける。知識を智慧まで高めるのである。

キーワード

価値観の差異 介護の本質 介護の哲学・倫理 生命倫理 アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

利用者の生活の質に着目した生命倫理が理解できる。援助者の価値観からするとマイナスと思える申し出に対して、寄り添うことができる。援助者と異なる利用者の価値観に徹底的に寄り添うことができる。他の専門職者に対しても、利用者の申し出を代弁できるプロの福祉援助者となることができる。ソーシャルワーク的視点を持った介護の専門家としての立ち位置を身につけ、他の専門職者とチームケアが展開できる能力を身につけることができる。

授業計画

- 第1回 生活の多様性(個人的生活)
- 第2回 生活の多様性(社会的生活)
- 第3回 価値観の多様性(実存的)
- 第4回 価値観の多様性(社会的)
- 第5回 介護独自の専門性(ケアカウンセリングの理解)
- 第6回 介護独自の専門性(ケアカウンセリングの実践方法)
- 第7回 介護における生命倫理(実存的)
- 第8回 介護における生命倫理(社会的)
- 第9回 介護における生と死(実存的)
- 第10回 介護における生と死(社会的)
- 第11回 介護と感情労働(実存的)
- 第12回 介護と感情労働(社会的)
- 第13回 ケアカウンセリング(1)

第14回 ケアカウンセリング(2)

第15回 ケアカウンセリングとスーパービジョン

授業の予習・復習

講義の実例として、受講生自身の現場体験をもとに進めていくので、常に現場における困難事例を持参すること。

使用教材

特定の教材を使用することはない。受講生提案の事例を使用テキストとする。必要に応じて資料等を準備し、資料等を基に個々の案件に対してベストな回答を探究する。

評価方法

発表等授業参加50%、レポート50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

講義で使用する事例を作成し、持参すること。事例等は評価の対象とする。

授業に対する熱意などは、減算で対応する(最大30%)。

講義等に関する質問等は、メールで受け付ける。yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

今年度よりの開講科目である。

科目名	担当者名	開講学期	単位
地域福祉特殊講義	高橋 信行	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613697

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

福祉計画と地域社会の関係を理解する。

概要

日本の行政福祉計画の歴史は、老人保健福祉計画からはじまった。それまでは総合計画の一部に盛り込まれていたにすぎなかった。平成5年以降、行政計画は量、質ともにさまざまに変化してきている。それらは自治体が福祉行政を展開するうえで、必要不可欠なものだったともいえようが、さまざまな課題も見え隠れする。ここでは、コミュニティワークを念頭に置きながら、その歴史的経緯とその策定プロセスを鹿児島における実際のケースを参照しながら、検討をすすめていく。課題については、コメント等を加えてフィードバックを行っていく。

キーワード

福祉計画、コミュニティワーク、アクションリサーチ、目的合理性、価値合理性、介護保険、小規模多機能

授業の到達目標

1. 行政計画の歴史的な流れを理解できる
2. 行政計画と民間計画の関係を理解できる
3. 福祉計画に関する住民参加の在り方を理解できる
4. 福祉計画が抱える課題を理解できる
5. 福祉計画のこれからの在り方について考えを持つことができる

授業計画

1. 福祉計画の現状と課題(オリエンテーションを含む)
2. 老人保健福祉計画からはじまった個別福祉計画
3. 自治体と住民が作る福祉計画ー徳之島3町の障害福祉計画
4. 調査をどう利用するかー天城町地域福祉計画
5. 南大隅町地域福祉計画ー身の丈に合った福祉計画
6. 調査と計画ーコミュニティワークの視点
7. 調査と計画ーアクションリサーチの視点
8. 中間まとめー理論的な含み
9. あり方検討から地域福祉活動計画ー旧始良町地域福祉活動計画
10. 介護保険だけでいいのかー旧隼人町地域福祉活動計画
12. 行政計画と民間計画の連携ー曾於市地域福祉活動計画
13. 小規模離島と福祉計画1ー十島村の場合
14. 小規模離島と福祉計画2ー獅子島の場合
15. まとめと展望

授業の予習・復習

次回の授業資料は、1週間前に提供し、予習ができるようにしたい。また課題等を課す。事前学習と事後学習で4時間程度は必要とする。

使用教材

授業時に配布する

評価方法

レポートによる評価(80%)と平常点(20%)によって総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは、授業終了後として、時間外の対応はメール等をお願いしたい。
nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

30年度からの科目である。

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会病理特殊講義	佐野 正彦	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613680

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

前期課程における「社会病理学特講」を前提にしたがって、あらかじめ前期課程の社会病理学特講を履修していることが望ましい)「社会病理とは何か？」を深く考え、教員と履修生とのあいだに一定程度の共通理解を構築したいと思う。

概要

社会病理学に関わる内外の文献を2、3を選定し、それらを熟読し、討議するかたちで進める。

キーワード

社会病理、逸脱、レッテル貼り、スティグマ、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

前期課程における「社会病理学特講」を前提に「社会病理とは何か？」を深く考えることができるようにする。

授業計画

- 第01回 オリエンテーション 「社会病理学」の特徴
- 第02回 ロンブローズの「生来性犯罪人」論
- 第03回 ロンブローズの遺産
- 第04回 シカゴ学派の社会問題論
- 第05回 シカゴ学派のアメリカ社会病理論への影響
- 第06回 サザランドの分化的接触論
- 第07回 サザランドの分化的接触論と「ホワイткаラーの犯罪」論
- 第08回 マートンのアノミー論と緊張理論①
- 第09回 マートンのアノミー論と緊張理論②
- 第10回 コーエンの非行文化理論
- 第11回 ラベリング論のパースペクティヴ①
- 第12回 ラベリング論のパースペクティヴ②
- 第13回 「原因論はいかに可能か？」①
- 第14回 「原因論はいかに可能か？」②
- 第15回 「社会病理とは何か？」再考

授業の予習・復習

授業前には予習を2時間以上行うこと。

授業後には、学習内容をしっかり整理したうえで、理解できなかったことの自己学習をすること。

使用教材

「テキスト」は開講時に指示する。「参考文献」は授業内で適宜指示する。

評価方法

「口頭発表50%、レポート50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会病理特講	佐野 正彦	前期	2

ナンバリングコード

D_WEL613680

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

前期課程における「社会病理学特講」を前提にしたがって、あらかじめ前期課程の社会病理学特講を履修していることが望ましい)「社会病理とは何か？」を深く考え、教員と履修生とのあいだに一定程度の共通理解を構築したいと思う。

概要

社会病理学に関わる内外の文献を2、3を選定し、それらを熟読し、討議するかたちで進める。

キーワード

社会病理、逸脱、スティグマ、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

前期課程における「社会病理学特講」を前提に、「社会病理とは何か？」を深く考えることができるようにする。

授業計画

- 第01回 オリエンテーション 「社会病理学」の特徴
- 第02回 ロンブローズの「生来性犯罪人」論
- 第03回 ロンブローズの遺産
- 第04回 シカゴ学派の社会問題論
- 第05回 シカゴ学派のアメリカ社会病理論への影響
- 第06回 サザランドの分化的接触論
- 第07回 サザランドの分化的接触論と「ホワイトカラーの犯罪」論
- 第08回 マートンのアノミー論と緊張理論①
- 第09回 マートンのアノミー論と緊張理論②
- 第10回 コーエンの非行文化理論
- 第11回 ラベリング論のパースペクティヴ①
- 第12回 ラベリング論のパースペクティヴ②
- 第13回 「原因論はいかに可能か？」①
- 第14回 「原因論はいかに可能か？」②
- 第15回 「社会病理とは何か？」再考

使用教材

「テキスト」は開講時に指示する。「参考文献」は授業内で適宜指示する。

評価方法

「口頭発表50%、レポート50%」で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

科目名	担当者名	開講学期	単位
ソーシャルワーク特殊講義	門田 光司	集中	2

ナンバリングコード

D_WEL613690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ソーシャルワークの定義や歴史及び実践モデルについての理解を深めるとともに、種々な事例を通して実践モデルの活用を促していく。

概要

本講義では、ソーシャルワークが発展してきた経緯及び多様な実践モデル(一般システム論的視点、生態学的視点、エンパワメントの視点、ストレングスの視点、ナラティブの視点、レジリエンスの視点、他)についての学習を深めるとともに、種々な事例を通して、これらの実践モデルがどのように活用されていくのかの理解と習得を目的とする。

キーワード

ソーシャルワーク、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ソーシャルワークの発展経緯を踏まえ、ソーシャルワーク固有の専門性について理解できる。また、ソーシャルワークの実践モデルについての理解を深め、種々な事例について実践モデルの活用方法についても理解できる。

授業計画

- 第1回 ソーシャルワークの定義について
- 第2回 ソーシャルワークの発展史
- 第3回 一般システム論的視点について
- 第4回 一般システム論的視点による事例検討
- 第5回 生態学的視点について
- 第6回 生態学的視点による事例検討
- 第7回 エンパワメントの視点について
- 第8回 エンパワメントの視点による事例検討
- 第9回 ストレングスの視点について
- 第10回 ストレングスの視点による事例検討
- 第11回 ナラティブの視点について
- 第12回 ナラティブの視点による事例検討
- 第13回 レジリエンスの視点について
- 第14回 その他のソーシャルワーク実践について
- 第15回 ソーシャルワーク実践モデルのまとめ

授業の予習・復習

授業前及び授業後には、ソーシャルワーク実践モデルに関する書籍を読み、事前学習及び事後学習を行っておくこと。

使用教材

教科書は使用しない。随時、資料を配布する。

評価方法

平常点50%、発表50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

以下の参考図書を事前学習及び事後学習に活用してください。

①加茂陽(編)「ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために」(世界思想社 2000年)、②久保紘章・副田あけみ(編)「ソーシャルワークの実践モデル」(川島書店 2005年)、③フランシス・J・ターナー著・米本秀仁(監訳)「ソーシャルワーク・トリートメント」(中央法規 1999年)、④山辺朗子・岩間伸之「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」(ミネルヴァ書房 2004年)

授業内容の質問は、授業前後で対応していく。

前年度の授業評価

シラバス内容については、変更はありません。

科目名	担当者名	開講学期	単位
ソーシャルワーク特講	門田 光司	集中	2

ナンバリングコード

D_WEL613690

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

ソーシャルワークの定義や歴史及び実践モデルについての理解を深めるとともに、種々な事例を通して実践モデルの活用を促していく。

概要

本講義では、ソーシャルワークが発展してきた経緯及び多様な実践モデル(一般システム論的視点、生態学的視点、エンパワメントの視点、ストレングスの視点、ナタティブの視点、レジリエンスの視点、他)についての学習を深めるとともに、種々な事例を通して、これらの実践モデルがどのように活用されていくのかの理解と習得を目的とする。

キーワード

ソーシャルワーク、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

ソーシャルワークの発展経緯を踏まえ、ソーシャルワーク固有の専門性について理解できる。また、ソーシャルワークの実践モデルについての理解を深め、種々な事例について実践モデルの活用方法についても理解できる。

授業計画

- 第1回 ソーシャルワークの定義について
- 第2回 ソーシャルワークの発展史
- 第3回 一般システム論的視点について
- 第4回 一般システム論的視点による事例検討
- 第5回 生態学的視点について
- 第6回 生態学的視点による事例検討
- 第7回 エンパワメントの視点について
- 第8回 エンパワメントの視点による事例検討
- 第9回 ストレングスの視点について
- 第10回 ストレングスの視点による事例検討
- 第11回 ナラティブの視点について
- 第12回 ナラティブの視点による事例検討
- 第13回 レジリエンスの視点について
- 第14回 その他のソーシャルワーク実践について
- 第15回 ソーシャルワーク実践モデルのまとめ

授業の予習・復習

授業前及び授業後には、ソーシャルワーク実践モデルに関する書籍を読み、事前学習及び事後学習を行っておくこと。

使用教材

教科書は使用しない。随時、資料を配布する。

評価方法

平常点50%、発表50%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

以下の参考図書を事前学習及び事後学習に活用してください。

①加茂陽(編)「ソーシャルワーク理論を学ぶ人のために」(世界思想社 2000年)、②久保紘章・副田あけみ(編)「ソーシャルワークの実践モデル」(川島書店 2005年)、③フランシス・J・ターナー著・米本秀仁(監訳)「ソーシャルワーク・トリートメント」(中央法規 1999年)、④山辺朗子・岩間伸之「ジェネラリスト・ソーシャルワーク」(ミネルヴァ書房 2004年)

授業内容の質問は、授業前後で対応していく。

前年度の授業評価

シラバス内容については、変更はありません。

科目名	担当者名	開講学期	単位
児童家庭福祉特殊講義	蓑毛 良助	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613694

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ: 児童・家庭のそれぞれの機能を高める為の福祉的視点。

概要

出生率の低下に伴う少子化の進行、子どもや家庭をめぐる環境の変化などによって、児童家庭施設はこれまでと違った展開が求められている。児童家庭福祉分野における基礎的・学際的・応用的な教育研究がさらに強く求められている。

本講義では、多様な様相をとりつつある現代の子どもと家庭をめぐる課題のうち、主要なものをピックアップして、福祉をベースにしつつ医療や教育心理の視点からもその実態と対処方策等を照射して理解を深めていくことにする。子どもの権利、発生予防、社会的支援策、母子関係、家庭のウェルビーイングなどが分析検討の際のキーワードになる。博士論文に関係した論文も取り上げ討論・講義感想文・レポート提出を繰り返しながらフィードバックしながら進める。

キーワード

児童福祉、家庭福祉、心身障害学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 児童・家庭のそれぞれの実態を把握し、児童・家庭の関係を福祉・医療・教育との連携から捉える視点を持つ。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 心身障害児と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第3回 児童養護と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第4回 反社会的問題行動と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第5回 非社会的問題行動と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第6回 虐待の発生要因と予防と対策、国内外の論文の講読
- 第7回 学校臨床、国内外の論文の講読
- 第8回 博士論文研究計画の検討
- 第9回 視・聴覚障害児に関する国内外の論文の購読
- 第10回 知的障害児に関する国内外の論文の購読
- 第11回 肢体不自由児に関する国内外の論文の購読
- 第12回 発達障害児に関する国内外の論文の購読
- 第13回 療育における家族支援に関する国内外の論文の購読
- 第14回 アスペルガーの当事者と家族支援に関する国内外の論文の購読
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業に関する論文を前もって渡すので予習をすること。当日の論文の復習をすることも関係する論文を多数読むことなどに努める。

使用教材

馬場禮子(2005)『臨床心理学概説』放送大学教育振興会
滝口俊子(2007)『心理臨床の世界』放送大学教育振興会
石部元雄他編(2008)『特別支援教育』福村出版
「児童家庭福祉」に関する国内外の論文、博士論文
国内外の学会誌

評価方法

受講姿勢やレポート発表の内容で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

受講生は、毎回出席し、テーマに関してレポート発表をする。オフィスアワーについての時間については、受講生と話し合いの上で決定する。

前年度の授業評価

授業では、視聴覚教材を活用したり関係する最新の論文を読ませたりした。討論も導入して主体的に授業に参加することができ博士論文の作成に参考になったという評価を受けた。

科目名	担当者名	開講学期	単位
児童家庭福祉特講	蓑毛 良助	後期	2

ナンバリングコード

D_WEL613694

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ: 児童・家庭のそれぞれの機能を高める為の福祉的視点。

概要

出生率の低下に伴う少子化の進行、子どもや家庭をめぐる環境の変化などによって、児童家庭施設はこれまでと違った展開が求められている。児童家庭福祉分野における基礎的・学際的・応用的な教育研究がさらに強く求められている。

本講義では、多様な様相をとりつつある現代の子どもと家庭をめぐる課題のうち、主要なものをピックアップして、福祉をベースにしつつ医療や教育心理の視点からもその実態と対処方策等を照射して理解を深めていくことにする。子どもの権利、発生予防、社会的支援策、母子関係、家庭のウェルビーイングなどが分析検討の際のキーワードになる。博士論文に関係した論文も取り上げ討論・講義感想文・レポート提出を繰り返しながらフィードバックして進める。

キーワード

児童福祉、家庭福祉、心身障害学、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標: 児童・家庭のそれぞれの実態を把握し、児童・家庭の関係を福祉・医療・教育との連携から捉える視点を持つ。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション
- 第2回 心身障害児と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第3回 児童養護と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第4回 反社会的問題行動と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第5回 非社会的問題行動と家庭福祉、国内外の論文の講読
- 第6回 虐待の発生要因と予防と対策、国内外の論文の講読
- 第7回 学校臨床、国内外の論文の講読
- 第8回 博士論文研究計画の検討
- 第9回 視・聴覚障害児に関する国内外の論文の購読
- 第10回 知的障害児に関する国内外の論文の購読
- 第11回 肢体不自由児に関する国内外の論文の購読
- 第12回 発達障害児に関する国内外の論文の購読
- 第13回 療育における家族支援に関する国内外の論文の購読
- 第14回 アスペルガーの当事者と家族支援に関する国内外の論文の購読
- 第15回 まとめ

授業の予習・復習

授業に関係した論文を前もって渡すので予習すること、当日の論文を復習するとともに関係する論文を多数読むこと。

使用教材

馬場禮子(2005)『臨床心理学概説』放送大学教育振興会
滝口俊子(2007)『心理臨床の世界』放送大学教育振興会
石部元雄他編(2008)『特別支援教育』福村出版
「児童家庭福祉」に関する国内外の論文、博士論文
国内外の学会誌

評価方法

受講姿勢やレポート発表の内容で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

受講生は、毎回出席し、テーマに関してレポート発表をする。オフィスアワーの時間については、受講生と話し合いの上で決定する。

前年度の授業評価

授業の評価では、視聴覚教材を活用したり授業のテーマに関する最新の論文を読ませたりしてわかりやすく、博士論文の作成に参考になった。

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉リサーチ特殊講義	佐野 正彦	前期	2
	高橋 信行		
	中山 慎吾		

ナンバリングコード

D_WEL610027

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

(佐野)質的調査の根底にある考え・思想を理解する。

(高橋)ケース・スタディを理解する。

(中山)RおよびRコマンドの活用法を理解する。

概要

(佐野担当部分)

「質的研究法を支える前提諸理論を考える」をテーマにします。エスノメソドロジーや会話分析などのこうした諸理論は「社会現象は人々の相互行為のなかで構築されていく」という共通の視座がある。履修者にはこの「社会構築主義的視座とは何か?」について一定の理解をもってもらおう。

(高橋担当部分)

社会福祉リサーチも、他の研究調査法と同様に、量的研究法と質的研究法とが考えられる。近年、質的研究法についての関心、研究成果等の蓄積がなされるようになり、科学的見地から事例等の扱いがなされるようになってきている。今年度は、ロバートK. インの『ケース・スタディの方法』を学習する。5回の講義で全体を理解するには無理があるが、その導入として理解をはかっていく。課題等にはコメントを加え、フィードバックを図っていく。

(中山担当部分)

数量的な分析で用いられるRとRコマンドの操作方法を学ぶ。テキストに沿って、テキストの中にあるデータを使いながら、実際に操作を行ってみる。

履修者がすでにRの使い方を学んだことがある場合も、テキストに沿ってあらためて操作方法を学習してみてもらいたい。Rコマンドは無料で手に入るソフトで、自宅のパソコンでも使うことができる。その点がSPSSとの違いとなっている。

キーワード

(佐野)構築主義、構成主義、状況、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

(高橋)ケース・スタディ、トライアングレーション、パイロット・ケース・スタディ、ケース・スタディ・プロトコル

(中山)数量的分析、R、Rコマンド、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

(佐野)質的調査の根底にある考え・思想を理解する。

(高橋)ケース・スタディを理解する。

(中山)RおよびRコマンドの活用法を理解する。

授業計画

1回～5回 佐野担当

- 第1回 オリエンテーション、ラベリングあるいはラベリング論とは何か？
- 第2回 ラベリング論からエスノメソドロジーへ
- 第3回 言説と言説分析
- 第4回 フーコーの権力論あるいは学問論・知識論
- 第5回 社会構築主義とは何か？

6回～10回 高橋担当

- 第6回 序論－ケース・スタディとは何か
- 第7回 ケース・スタディの設計
- 第8回 ケース・スタディの実施
- 第9回 ケース・スタディの実施：証拠の分析
- 第10回 ケース・スタディの証拠の分析

11回～15回 中山担当

- 第11回 RとR Commanderの概要、インストールの方法
- 第12回 データの入力と管理
- 第13回 クロス集計、カイ二乗検定
- 第14回 多変量解析
- 第15回 グラフ作成

授業の予習・復習

(佐野・高橋・中山) 授業前には指定部分を2時間以上予習し、授業後には学んだことについて理解できたことと不明なところを整理したうえでさらなる理解に努めること。

使用教材

- (佐野) 英語論文を読む予定です。授業で使う教材はこちらで用意します。
- (高橋) ロバート K. イン(近藤公彦 訳)『ケース・スタディの方法』千倉書房 1996
- (中山) 舟尾暢男『R Commander ハンドブック』オーム社 2008(購入し毎回持参すること)。

評価方法

- (佐野)「平常点50%、レポート50%」の割合で評価する。
- (高橋)「平常点50%、レポート50%」の割合で評価する。
- (中山)「授業への参加状況50%、授業における課題50%」の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーなどについては開講時に話し合いによって決めます。何か疑問点や質問点がありましたら、次のメール・アドレスを通じて対応いたしますので、遠慮せずにアクセスしてください。msano@soc.iuk.ac.jp(佐野)
テキストをすべて講義で解説するわけではないので、テキスト購入等に関しては、受講生と話し合ってから決めたい。オフィスアワーは授業終了後行う。時間外の場合は、メールでお願いしたい。nobu@soc.iuk.ac.jp(高橋)

テキスト(『R Commander ハンドブック』)を事前に購入し毎回(第11～15回)持参すること。実際にパソコンを操作するのでノートパソコンとUSBメモリーを持参すること(第11～15回)。疑問点があれば授業時かメールにて連絡してください。nakayama@soc.iuk.ac.jp(中山)

前年度の授業評価

(佐野・高橋・中山) 本特講は3人の教員によって分担する形式で行います。前年度は1人の履修がありました。履修者と相談しながらそれなりに満足できる内容の授業ができたと思う。

科目名	担当者名	開講学期	単位
社会福祉リサーチ特講	佐野 正彦	前期	2
	高橋 信行		
	中山 慎吾		

ナンバリングコード

D_WEL610027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

(佐野)質的調査の根底にある考え・思想を理解する。

(高橋)ケース・スタディを理解する。

(中山)RおよびRコマンドの活用法を理解する。

概要

(佐野担当部分)

「質的研究法を支える前提諸理論を考える」をテーマにします。エスノメソドロジーや会話分析などのこうした諸理論は「社会現象は人々の相互行為のなかで構築されていく」という共通の視座がある。履修者にはこの「社会構築主義的視座とは何か？」について一定の理解をもってもらおう。

(高橋担当部分)

社会福祉リサーチも、他の研究調査法と同様に、量的研究法と質的研究法とが考えられる。近年、質的研究法についての関心、研究成果等の蓄積がなされるようになり、科学的見地から事例等の扱いがなされるようになってきている。今年度は、ロバートK. インの『ケース・スタディの方法』を学習する。5回の講義で全体を理解するには無理があるが、その導入として理解をはかっていく。課題等にはコメントを加え、フィードバックをはかっていく。

課題(中山担当部分)

数量的な分析で用いられるRとRコマンドの操作方法を学ぶ。テキストに沿って、テキストの中にあるデータを使いながら、実際に操作を行ってみる。

履修者がすでにRの使い方を学んだことがある場合も、テキストに沿ってあらためて操作方法を学習してみてもらいたい。Rコマンドは無料で手に入るソフトで、自宅のパソコンでも使うことができる。その点がSPSSとの違いとなっている。

キーワード

(佐野)構築主義、構成主義、状況、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

(高橋)ケース・スタディ、トライアングレーション、パイロット・ケース・スタディ、ケース・スタディ・プロトコル

(中山)数量的分析、R、Rコマンド、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

(佐野)質的調査の根底にある社会学の諸議論や思想を理解できるようにする。

(高橋)1. ケーススタディ法の意義が理解できる。

2. ケーススタディ法を実施する手順が理解できる。

(中山)RおよびRコマンドの活用法を理解する。

授業計画

1回～5回 佐野担当

第1回 オリエンテーション、ラベリングあるいはラベリング論とは何か？

第2回 ラベリング論からエスノメソドロジーへ

第3回 言説と言説分析

第4回 フーコーの権力論あるいは学問論・知識論

第5回 社会構築主義とは何か？

6回～10回 高橋担当

第6回 序論－ケース・スタディとは何か

第7回 ケース・スタディの設計

第8回 ケース・スタディの実施

第9回 ケース・スタディの実施：証拠の分析

第10回 ケース・スタディの証拠の分析

11回～15回 中山担当

第11回 RとRコマンドの概要、インストールの方法

第12回 データの入力と管理

第13回 クロス集計、カイ二乗検定

第14回 多変量解析

第15回 グラフ作成

授業の予習・復習

(佐野・高橋・中山)授業前に指定部分を2時間以上予習し、授業後には学んだことについて理解できたことと不分明なところを整理したうえでさらなる理解に努めること。

使用教材

(佐野) 英語論文を読む予定です。授業で使う教材はこちらで用意します。

(高橋) ロバート K. イン(近藤公彦 訳)『ケース・スタディの方法』千倉書房 1996

(中山) 舟尾暢男『R Commander ハンドブック』オーム社 2008(購入し毎回持参すること)。

評価方法

(佐野)「平常点50%、レポート50%」の割合で評価する。

(高橋)「平常点50%、レポート50%」の割合で評価する。

(中山)「授業への参加状況50%、授業における課題50%」の割合で評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーなどについては開講時に話し合いによって決めます。何か疑問点や質問点がありましたら、次のメール・アドレスを通じて対応いたしますので、遠慮せずアクセスしてください。msano@soc.iuk.ac.jp(佐野)

テキストをすべて講義で解説するわけではないので、購入等に関しては、受講生と話し合ってから決めたい。

(高橋)オフィスアワーは、市授業終了後とし、時間外はメールにて対応したい。nobu@soc.iuk.ac.jp

テキスト(『R Commander ハンドブック』)を事前に購入し毎回(第11～15回)持参すること。実際にパソコンを操作するのでノートパソコンとUSBメモリーを持参すること(第11～15回)。疑問点があれば授業時かメールにて連絡してください。nakayama@soc.iuk.ac.jp(中山)

前年度の授業評価

(佐野・高橋・中山)本特講は3人の教員によって分担する形式で行います。前年度は1人の履修がありました。履修者と相談しながらそれなりに満足できる内容の授業ができたと思う。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	佐野 正彦	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語による授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会病理学・犯罪社会学の諸視角の理論的深化。

概要

本演習では、特定の(社会病理現象)を研究対象として措定し、その徹底研究により学位請求論文を執筆し、「博士号」を取得することを目指す。

キーワード

社会病理、逸脱、スティグマ、レッテル貼り、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

社会病理学・犯罪社会学の諸視角に関して理論的深化につとめ、自らの研究対象にアプローチ(接近)できるようにする。

授業計画

この1年間で何を達成するか? 『大学院の紀要』や『学会誌』などに論文を掲載することを目標として学習する。

これまでに培ってきた「学知」をさらに精錬させ、いかなるパースペクティブから研究対象に迫るかを決定する。さらに、研究対象とする特定の(社会病理現象)に関わる「日本的・世界的事情」を的確に把握した上で、独自の「仮説」を提示し、その「科学的検証」を目指す。

より具体的には、博士論文審査のフローチャートに基づいて、「研究計画書」を提出し(1年次)、「博士論文計画発表」を行い(1年次)、「博士論文中間報告」を行ったうえで(2年次)、その成果を学会などで公表し、併せて「査読論文」を執筆する(2年次)などの学的営為を経て「博士論文」を書く(3年次)ことになる。

こうしたプロセスを着実に経ることによって、博士論文に耐えうる専門技術や研究能力を培うことができるのである。

- 第01回 オリエンテーションー1年間の目標を定めるー
- 第02回 論文執筆に必要な文献には何があるかを考える。
- 第03回 論文執筆に必要なキーとなる学者・研究者などを考える。
- 第04回 論文執筆に必要な学会・研究会などを考える。
- 第05回 研究発表&討論① アイデアは?
- 第06回 研究発表&討論② どこに独自性があるのか? ①
- 第07回 研究発表&討論③ どこに独自性があるのか? ②
- 第08回 研究発表&討論④ 論文の表記方法 ①
- 第09回 研究発表&討論⑤ 論文の表記方法 ②
- 第10回 研究発表&討論⑥ 何を論拠にするか? ①
- 第11回 研究発表&討論⑦ 何を論拠にするか? ②

- 第12回 研究発表&討論⑧ 論理的思考と論理的記述
- 第13回 論文の途中経過レポート提出
- 第14回 レポートの検討
- 第15回 前期にやったことの総復習
- 第16回 オリエンテーションー後期の6ヶ月どのように過ごすかー
- 第17回 前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく①
- 第18回 前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく②
- 第19回 前期作成レポートを〈論文〉に仕上げていく③ー本稿は博士論文の中でどのような位置づけになるのか？ー
- 第20回 社会病理学のパースペクティブ再考①ーいかなるパースペクティブが使えるのか？ー
- 第21回 社会病理学のパースペクティブ再考②ー社会解体論ー
- 第22回 社会病理学のパースペクティブ再考③ー犯罪の正常性ー
- 第23回 社会病理学のパースペクティブ再考④ー犯罪の潜在機能ー
- 第24回 社会病理学のパースペクティブ再考⑤ー犯罪者へのリアクションの効果ー
- 第25回 社会病理学のパースペクティブ再考⑥ー文化論ー
- 第26回 社会病理学のパースペクティブ再考⑦ー学習論ー
- 第27回 社会病理学のパースペクティブ再考⑧ー社会の階級論ー
- 第28回 社会病理学のパースペクティブ再考⑨ー社会病理の定義問題ー
- 第29回 社会病理学のパースペクティブ再考⑩ー社会と社会病理ー
- 第30回 1年間の研究生生活の総括

授業の予習・復習

授業前には、2時間以上の予習を行うこと。

授業後には、学んだことをしっかり整理したうえで、理解できなかった内容につき自己学習につとめること。

使用教材

博士論文の進捗具合を勘案して適宜指示する。

評価方法

学位請求論文の内容により評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワー等につきましては初回の授業時にお知らせいたしますが、質問・相談は随時受け付けていますので、希望者はメール連絡をしてください。msano@soc.iuk.ac.jp

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	高橋 信行	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

研究方法としての質的研究法、量的研究方法、ケーススタディ法およびアクションリサーチを理解したうえで、博士論文作成に取り組む。

概要

博士論文作成の予備作業として、研究方法の解説を中心に学習を行う。これらを通して、研究論文作成の過程を理解する。事例研究や調査手法についての理解が十分でない場合は、順次それらについての情報を提供する。課題についてはコメントを加え、フィードバックを行う。

キーワード

アクティブラーニング、アクションリサーチ、質的研究法、量的研究方法

授業の到達目標

研究方法としての質的研究法、量的研究方法、ケーススタディ法を理解し、研究に活かすことができる。

授業計画

1. オリエンテーション／研究とは何かについて
2. 研究の手順と研究計画
3. データ収集の方法
4. 質的研究法を学ぶ
5. 量的研究方法を学ぶ
6. ケーススタディ法を学ぶ
7. アクションリサーチ法を学ぶ(以下AR)
8. ARの理論と原則
9. AR舞台を設定する
10. ARを考える:解釈し、分析する
11. ARを行動する:問題を解決する
12. 持続可能な変化と発展をめざす戦略的計画
13. AR形式の整った報告書
14. ARを理解する
15. ARのまとめ
16. 博士論文指導1(論文作成の進捗状況に即した方法論の指導)
17. 博士論文指導2(上記と同様)
18. 博士論文指導3(上記と同様)
19. 博士論文指導4(上記と同様)
20. 博士論文指導5(上記と同様)
21. 博士論文指導6(上記と同様)

22. 博士論文指導7(上記と同様)
23. 博士論文指導8(上記と同様)
24. 博士論文指導9(上記と同様)
25. 博士論文指導10(上記と同様)
26. 博士論文指導11(上記と同様)
27. 博士論文指導12(上記と同様)
28. 博士論文指導13(上記と同様)
29. 博士論文指導14(上記と同様)
30. 博士論文指導15(上記と同様)

授業の予習・復習

授業時に課題として提示するものと、事前に配布するものがある。少なくとも4時間以上の学習時間を担保する。

使用教材

ストリンガー『アクション・リサーチ』目黒輝美・磯部卓三(監訳)発行フィリア 発売 星雲社 2012
その他の参考書は、演習の中で示す。

評価方法

レポート内容によって80%評価し、20%は平常点とする。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

オフィスアワーは授業終了後に行う。時間外の場合は、メール等で行う。nobu@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度は開校しておらず、授業評価は行っていない。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	田中 安平	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

社会福祉・介護現場における課題の本質を見極め・分析する視点を持ち、最終ゴールとしての目標を構築する。目標は、理想と現実との乖離を認識したうえで提案するものである。

概要

第1回から第2回にかけては、修士論文として書き上げた内容をより深化させるか、課題として残された内容を解決すべく新たに取り組むか、時間的経過の中で新規な課題として意識に上った内容をテーマとするのか、自己に問いただす期間とする。

その後、大学院の紀要や学会誌などに関連する論文を積極的に執筆し、投稿することを望む。生活支援という臨床の現場において、抜本的に解決すべき課題は枚挙にいとまがないほどである。オリジナリティーは臨床の中にある。毎日の実践の中から真に解決すべき課題を抽出し、「課題が発生する要因」や「課題が引き起こす要因」、「課題を解決するために整えるべき環境」や「課題に対応すべき具体的な方法」等科学的実証を目指す。

キーワード

生活支援という臨床 査読付き論文 オリジナリティー アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

査読制のある学会誌へ論文を投稿できる。先行研究から新たな示唆を得ることができ、柔軟な思考を育む。臨床の場における生活支援の中から新たな知見を得ることができる。獲得した知見を実践に展開できる。3年間で博論を完成させる。

授業計画

3年間の授業概要は以下のようになる。

1年次: 本研究科の博士学位論文審査フローチャートをもとに、「研究計画書」を提出する。

2年次: 計画に基づく研究結果を、「中間報告」として発表する。

3年次: 論文を完成させる。

1年次の授業計画の概要は以下のようになる。

1年次:

第1回: オリエンテーション

第2回: 研究テーマ設定(問題の所在)

第3回: 研究テーマ設定(学術的背景)

第4回: 研究テーマ設定(研究目的等)

第5回: 研究テーマ決定

第6回: 先行文献研究(国内)

第7回: 先行文献研究・指導(国内)

第8回: 先行文献研究(国外)

第9回: 先行文献研究・指導(国外)

第10回:文献リストの作成
第11回:文献リストの作成・指導
第12回:論文の骨子作成
第13回:論文の骨子作成・指導
第14回:学会論文・研究ノート着手
第15回:学会論文・研究ノート指導
第16回:学会論文執筆着手
第17回:学会論文執筆指導
第18回:調査票作成
第19回:調査票指導・修正
第20回:研究倫理審査委員会審査
第21回:論文執筆指導
第22回:調査票集計
第23回:調査票集計・分析
第24回:調査票分析・解釈
第25回:学会論文・研究ノート投稿・発表
第26回:調査票分析・解釈指導
第27回:研究経過報告
第28回:研究経過報告・指導
第29回:研究経過指導・展望
第30回:博論執筆着手

授業の予習・復習

実践学である社会福祉は、常に臨床との関わりが求められる。執筆している博論の内容が実践の場にいかなる影響を与えているか、常に検証しながら作成することが求められる。論文が実践に影響を与え、実践の中から論文にフィードバックできる真理を抽出する意識性を常に持ち続けること。

使用教材

特定のテキストは使用しない。各自が必要なテキスト(資料)等を持ち寄り、持ち寄ったテキスト(資料)等をもとに講義を進める。適宜教材を指示する。

評価方法

研究内容・目標の達成状況60%、研究姿勢等の平常点40%で総合的に評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業に対する熱意等の評価は、減算により評価する(最大30%)。

臨床での悩み・相談等、いつでも研究室に来られたし。

時間的制約がある場合、以下のメールでの対応も可能。

yasuhira@soc.iuk.ac.jp

前年度の授業評価

前年度の授業評価は実施していないが、院生の実践現場にフィードバックでき、かつ博論を完成させることのできるゼミとしたい。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	千々岩 弘一	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

設定した研究テーマに関しての新たな見解や独自性のある見解の創出

概要

受講生の研究テーマに基づいて、その研究を深化させる文献購読や調査などを行う。

キーワード

アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:問題意識に基づいて設定した研究テーマに関し、これまでの研究の到達点を踏まえながら、新たな見解や独自性のある見解を創出することができる。

授業計画

受講生の研究テーマに基づいて、毎回、研究の進捗状況を報告し、それに基づいて意見交換及び助言を行う。

第1回オリエンテーション(演習の目的・目標、内容、方法、評価などに関する説明)

第2回博士論文研究テーマの設定1

第3回博士論文研究テーマの設定2

第4回博士論文研究方法の確認

第5回博士論文構成の立案1

第6回博士論文構成の立案2

第7回博士論文参考文献リストの作成に関する助言

第8回博士論文草稿の作成1(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第9回博士論文草稿の作成2(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第10回博士論文草稿の作成3(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第11回博士論文草稿の作成4(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第12回博士論文草稿の作成5(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第13回博士論文研究方法の再確認

第14回博士論文草稿の作成6(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第15回博士論文草稿の作成7(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第16回博士論文草稿の作成8(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第17回博士論文草稿の作成9(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第18回博士論文草稿の作成10(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第19回博士論文草稿の作成11(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第20回博士論文草稿の作成12(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第21回博士論文草稿の作成13(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)

第22回博士論文草稿の作成14(研究の進捗状況の報告とそれに対する助言)
第23回博士論文草稿の完成1(完成した修士論文の報告とそれに対する助言)
第24回博士論文の完成2(修正した修士論文の報告とそれに対する助言)
第25回博士論文の校正1
第26回博士論文の校正2
第27回博士論文の校正3
第28回博士論文の完成
第29回口頭試問準備①
第30回口頭試問準備②

授業の予習・復習

前時の助言に基づいて、自らの課題を追究すること。

使用教材

受講者による「文献リスト」の作成をもとにしながら、必要に応じて、文献・資料を配布・紹介する。

評価方法

論文作成に対する態度及びその質に対して評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

アポイントを取ったうえで、遠慮なく相談に来てください。

前年度の授業評価

前年度は受講者がおらず、授業評価は行っていない。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	中山 慎吾	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

高齢者保健福祉等に関するテーマを主に扱い、文献収集や学术论文の基本的な書き方、パソコンの操作、研究方法を学習し、論文作成を行う

概要

- ・学术论文の基本的な書き方を学ぶ。
- ・論文作成に必要なパソコンの操作を学ぶ。
- ・英文文献を収集、読解の方法について学ぶ。
- ・高齢者保健福祉等に関する研究方法を理解する。
- ・レポート等に関してはその後の授業またはEメールにてフィードバックを行う。

キーワード

博士論文作成、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

- ・学术论文の基本的な書き方を理解し実践できる。
- ・論文作成に必要なパソコンの操作ができる。
- ・英文文献を収集し、読むことができる。
- ・高齢者保健福祉等に関する研究方法を理解し、研究をすすめることができる。

授業計画

- 第1回 オリエンテーション(大学院での学習)
- 第2回 オリエンテーション(論文を書くとは)
- 第3回 関心のあるテーマの議論(自由議論)
- 第4回 関心のあるテーマの議論(テーマを絞った議論)
- 第5回 文献検索(検索の基本)
- 第6回 文献検索(テーマに関する資料)
- 第7回 文献検索(収集資料に基づく検討)
- 第8回 文献の読解(読解の方法)
- 第9回 文献の読解(発表・討論)
- 第10回 文献の読解(前回の続き)
- 第11回 研究計画の検討(論文の構造)
- 第12回 研究計画の検討(研究方法)
- 第13回 研究計画の検討(具体的な研究手順)
- 第14回 パソコン操作の確認(基本操作)
- 第15回 パソコン操作の確認(応用学習)
- 第16回 進捗状況の確認(これまでの振り返り)
- 第17回 進捗状況の確認(論文作成に関する確認等)

- 第18回 文献検索(必要な資料収集)
- 第19回 文献検索(文献一覧)
- 第20回 研究の展開(文献または調査研究)
- 第21回 研究の展開(研究計画の確認)
- 第22回 研究の展開(具体的な進行)
- 第23回 研究計画報告の準備(レジュメ作成)
- 第24回 研究計画報告の準備(レジュメ作成)
- 第25回 研究計画報告の準備(パワーポイント等)
- 第26回 研究の展開(追加資料収集等)
- 第27回 研究の展開(資料分析等)
- 第28回 研究の展開(資料分析等)
- 第29回 原稿執筆(基本の理解)
- 第30回 原稿執筆(補足的学習)

授業の予習・復習

授業の前後に必ず合計4時間程度の予習・復習を行うこと(授業前:次回のテーマに関する資料収集・読解等、授業後:授業での配布資料等の読解・考察等)。

使用教材

授業開始時・授業期間中等に指示する。

評価方法

授業での討論等への参加状況40%、レポート・発表等60%

履修上の留意事項・授業時間外の対応

- ・授業計画等は変更する場合がある。・オフィスアワー等については授業開始時などに指示する。
- ・Eメールアドレス: nakayama@soc.iuk.ac.jp
- ・授業途中で課したレポートや課題に関しては、授業等においてフィードバックを行う。

前年度の授業評価

博士論文の作成に向けて、学生の研究の進捗等に合わせて、指導を進めました。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	蓑毛 良助	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

テーマ:人々の幸福を支援する為の論文作成を実現させる。

概要

本授業は、福祉社会学研究科(博士後期課程)の演習科目の一つとして、臨床発達心理学の問題を中心としたの研究指導をおこなう。すなわち、乳幼児から高齢者までの発達上の問題を多面的かつ科学的に考究し、人類の安定と幸福の発展に寄与しうる研究成果を目指して、院生と教員とが共同学修をおこなうものである。博士論文に関係した国内外の論文について他の院生や第三者も加えて討論して修正論文の提出を繰り返しながらフィードバックして進める。

キーワード

博士論文のテーマの確認、先行研究の確認、研究方法の確認、結果の客観的分析、仮設の確認と考察、引用文献・参考文献の整理、資料の整理、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

到達目標:論文の質を高め、全国の学術雑誌に投稿する。

授業計画

- 第1・2回 博士論文仮題の構想
- 第3・4回 博士論文目次概要の構想
- 第5・6回 博士論文仮目次作成
- 第7・8回 参考文献収集法についての共同学修
- 第9・10回 参考文献のリストアップ作業
- 第11・12回 参考文献の調査・収集についての打ち合わせ
- 第13・14回 研究方法についての共同学修
- 第15・16回 参考文献の講読(1)
- 第17・18回 参考文献の講読(2)
- 第19・20回 参考文献の講読(3)
- 第21・22回 研究方法の検討(1)
- 第23・24回 研究方法の検討(2)
- 第25・26回 研究方法の検討(3)
- 第27・28回 結果の分析方法の検討
- 第29・30回 考察についての共同学修

授業の予習・復習

博士論文のテーマの確認、先行研究の論文を多数読むこと、結果を客観的に分析すること、仮設の確認と考察、引用文献・参考文献の整理、資料の整理などに努める。

使用教材

日本社会福祉学会「社会福祉学」の論文
日本福祉心理学会「福祉心理学研究」の論文
日本特殊教育学会「特殊教育学研究」の論文
日本コミュニケーション障害学会「コミュニケーション障害学」の論文
日本教育心理学会「教育心理学研究」の論文

評価方法

定められた博士論文のテーマについての資料収集・文献講読・カード作成・研究方法の検討・結果の分析方法・考察の検討等を実施すること、また、それらを題材とする教員との討論学習を遅滞なく遂行することを最低基準とする。そのほかに、受講態度、学会発表、論文執筆等を勘案して総合的に評価する。積極的にテーマに関連する文献を探し論文の要約を蓄積することや、フィールド調査等を授業時間外にも取り組んだかも評価の対象とする。

前年度の授業評価

博士論文作成の過程で最新の論文を提供したり、研究のオリジナリティに関するヒントを与えたり、精神的にも支えて頂いたので博士論文を完成させる事が出来たという評価を受けた。

科目名	担当者名	開講学期	単位
特別研究(博士論文指導)	吉留 久晴	1～3年次	8

ナンバリングコード

D_WEL710027

使用言語

日本語で行う授業

授業形態

演習(新入生ゼミナール、専門演習、論文・研究指導、ワークショップ、対話・討論型授業)

テーマ

教育学研究に必要な能力の習得及び向上

概要

本演習で、受講生は教育学研究法に関する指導を受けながら、以下のような研究活動に取り組む。まず、博士論文作成につながるように、各自の問題意識に基づき研究テーマを設定する。ついで、そのテーマに関する先行研究の収集・分析を行い、先行研究で十分に解明されていない課題について明らかにする。さらに、上記の基礎作業を行いながら、問題意識・研究テーマを一層明確にしつつ、関連する論文や資料の収集・分析に取り組む。こうした研究活動をベースとして、受講生にはオリジナリティーの高い博士論文の作成を目指してもらう。

キーワード

教育学研究、アクティブ・ラーニング

授業の到達目標

1. 教育・学校問題に関する諸問題等を多角的かつ客観的に把握することができる。
2. 教育・学校問題に関する事実や実態等を究明することができる。
3. 調査・分析した内容等を口頭および文章で論理的に説明することができる。

授業計画

※下記の内容は受講生の人数や研究テーマによって変更する可能性がある。

第1回 前期ガイダンス
第2.3回 研究テーマの設定
第4.5回 文献資料の収集・分析法の指導
第6-10回 先行研究の分析結果の発表
第11・12回 研究方法の指導
第13-15回 研究視角・方法の検討
第16回 後期ガイダンス
第17-25回 研究成果の発表
第26-29回 研究計画・論文構成の検討
第30回 総括

授業の予習・復習

各授業後に合計で4時間程度の復習を行うこと。

使用教材

テキストは使用しない。参考文献等については、授業中に適宜紹介する。

評価方法

授業での発表やレポートの内容、研究活動の進捗状況・成果などにより評価する。

履修上の留意事項・授業時間外の対応

授業外での質問・相談等には、研究室で対応する。

前年度の授業評価

該当なし。